

ウェブマスターと図書館員

—インターネット時代の図書館員に求められる知識とスキル—

岸田 和明 (駿河台大学)

先日 (5/13) 開催された本部会の研究集会では、インターネット上の情報資源をレファレンスや検索の授業にどのように取り込むかについて、活発な討議がなされました。正直に申し上げますと、理念的な側面が先行したかつての「エレクトロニックライブラリ」や「ニューメディア」の経験から、数年前まではインターネットの将来性に多少の疑問を持たないわけではなかったのですが、今となっては、そのような疑念も過去のものとならなくなってしまったようです。インターネット先進国の米国では、「図書館員はウェブマスター (Web Master) へと変身を遂げている」というような主旨の議論も一部見受けられるようですが、そこまで極端でなくとも、図書館員が一般社会に認められる情報専門家であり続けるには、インターネットに対するさまざまな知識やスキルを身につけることが必要不可欠になっているのが現状であるかと思えます。

そこで、当然、図書館学教育において、どの程度インターネットを取り込むかが大きな問題になります。先日の研究集会の焦点の1つはそこにあったわけですが、本部会としては初めての試みということもあり、十分な議論までは踏み込めなかったように感じます。しかし、その意見交換の場において「きっかけ」だけはつかめたようです。それは「ウェブマスターを育てるには、インターネット自体の利用・検索を教えるだけでは十分ではない」という点です。研究集会の意見交換において、このことが直接的に議論されたわけではありませんが、いろいろな方のご意見を伺っていて、このような考えが頭に浮かびました。以下、これについて私見を少し述べてみたいと思います。

結論から言えば、真のウェブマスターになるには、情報に対する高度なセンスが要求され、それを培うには、コンピュータ登場以前の「古い」図書館技術への習熟が必要だということです。HTTPを理解し、ブラウザを自在に扱えるだけでは足りません。冊子やカードという、蓄積・検索技術の観点からは非常に「貧困な」媒体上で、何とか高度な資料組織を実現しようとした先人の工夫・努力を学び、それを「潜在意識」のうちに留めながらインターネットに対峙することが重要であると考えます。例えば、コロン分類法などは、現在では実用的には「無用の長物」かもしれませんが、制約された紙媒体の上で、理論面での合理性と実用面での利便性とを同時に追究し、それなりのレベルに達した「傑作」であると思います。そして、このような過去の技術や工夫の中に「情報」に対する問題の本質が隠されていて、それに対する意識こそが「情報のセンス」であり、それと最先端のインターネットの知識とを結び付けることによって、はじめて「有能な」ウェブマスターが育つのではないかと考えます。逆に、それらを知らない、ある意味で「薄っぺらな」、ウェブマスターを育成してもしょうがないようにも思います。もちろん、精通しておく必要のある知識・技術として、書誌や事典といったレファレンス資料に関するものなども含められるべきでしょう。

しかしながら、「言うはやすし」で、限られた授業時間の中であれもこれも教えるというわけにはいきませんし、教わる側の消化不良も起こるでしょう。具体的には、現行カリキュラムの中で、新しい技術にどれだけの時間を割き、その分、従来の内容をどれだけ省略するかという「取捨選択」の問題になります。同時に、旧来の技術と新しい技術とをどのように結び付けて教えれば最大の教育効果が得られるかという問題もありますし、古い技術を学ぶことへの動機づけも不可欠です。さらには、近々「情報」関連の授業科目が高等学校等で拡充されるわけですが、そのような小・中・高教育の変化にも対応していく必要があります。

結局、「私なり」に考えてみたところ、取り組むべき課題の列挙に終わってしまいました。上で述べましたように、本部会においてはこの問題に関する議論は始まったばかりですが、インターネットに関する世の中の動きの速さを考えれば、あまりのんびりはしてられません。さらには、私自身の関心から言えば、オンライン検索時代の古い検索技術から一歩進んだ検索理論・技術の実用化がどんどん進んでいます。くれぐれも図書館員が「時代遅れの情報専門家」にならないよう(手後れにならないよう)、教育の現場から貢献をしていく必要があるように感じます。

日本図書館協会図書館学教育部会 2000 年度総会議事録

日時 2000年5月13日(土) 11:15~12:15

場所 東横学園短期大学 211 教室

(5)「会報」の発行:第52~55号の発行

現時点での部会員数 292 名のうち、出席が 21 名、委任状が 80 名の合計 101 名であり、総会が成立する旨の報告が小田光宏幹事(青山学院大学)よりなされた。続いて、実践女子短期大学の石井紀子氏を議長に選出し、審議に入った。

1. 会勢報告

高山正也部会長(慶應義塾大学)より、会勢についての報告がなされた。部会員の若干の増加、司書資格取得者の就職難の状況などが報告された。

2. 1999 年度主要活動報告

以下の活動に関して、小田光宏幹事より報告があり、了承された。

(1)部会総会:1999年5月19日 場所:日本図書館協会第一会議室、議題【1】1998年事業報告および会計報告、【2】役員選挙結果の報告と役員の交代、【3】1999年度事業計画および予算計画

(2)研究集会:1999年7月30日、31日 於:日本図書館協会研修室、テーマ:司書・司書教諭養成教育の方向と展開、報告:古賀節子、岡本薫、田窪直規、二村健、戸田光昭、天道佐津子、大越朝子の各氏

(3)第85回全国図書館大会(滋賀)第12分科会:1999年10月28日 於:スカイプラザ大津、テーマ:転換期を迎えた図書館学教育、講演・報告:小川俊彦、榎倉執子、岸田和明、小林正子、渡辺信一の各氏

(4)「日本の図書館情報学教育2000」の編集(発行は2000年度)

3. 部会幹事会開催状況

小田光宏幹事より、1999年度に、7回の部会幹事会が開催されたこと(うち1回は2000年に入ってから)が報告された。

4. 1999 年度会計決算・監査報告

野末俊比古幹事(青山学院大学)より、1999年度の決算報告があり、併せて、適正な会計処理がおこなわれている旨の報告を会計監査より受けたとの報告があった。決算報告は以下の通りである。

平成11年度(1999年度)決算報告(単位:円)

収入の部

費目	予算	決算
部会費	558,000	454,000
事業収入	210,000	300,000
交付金	180,000	180,000
協会補助	100,000	100,000
繰越金	216,351	216,531
合計	1,264,351	1,250,351

支出の部

費目	予算	決算
事務用品費	20,000	1,990
振込手数料	20,000	16,507
会議費	110,000	68,628
通信費	130,000	176,110
交通費	260,000	286,000
人件費	90,000	27,000
会報等印刷費	300,000	104,500
研究集会等費	80,000	141,705
調査・編集費	250,000	9,000
選挙管理費	0	23,100
雑費	4,351	0
繰越金	0	395,811
合計	1,264,351	1,250,351

平成11年度(1999年度)会計監査報告

平成11年(1999年)度の会計監査の結果、事務処理、帳簿記入は正確に行われていることを報告します。

平成12年5月10日

会計監査 宮内 美智子 ㊟

平成12年5月10日

会計監査 前園 主計 ㊟

5. 2000年度事業計画案

2000年度の事業計画について、下記のとおり、高山正也部会長より報告があり、若干の質疑応答ののち、了承された。

- (1) 研修活動の一環としての研究集会の実施(年度内2回)
- (2) 全国図書館大会における分科会の開催・運営
- (3) 部会報の発行
- (4) 「図書館学受講生の進路調査」の検討
- (5) 少子化・学生減少に対する図書館学教育(司書養成)の対応に関する調査・研究
- (6) その他:

①「日本の図書館情報学教育2000」の発行

②役員選挙:選挙管理委員長には戸田慎一氏(東洋大学)が就任予定

なお、質疑応答の要旨は以下の通りである。

・上記(5)に関して、その意図や方向性についてのさらなる説明が求められ、高山正也部会長より追加説明がなされた。

・図書館学教育が単なる資格取得のためのものではなく、

1つの教育を担うものであることを内外にアピールすべきとの意見が出された。

・上記(4)に関して、各大学で早めに手を打つために、その調査過程・結果に関して、早めの報告してほしいとの要望が出された。

6. 2000年度予算案

野末俊比古幹事より、下記のとおり案が提出され、了承された。

収入の部

費目	予算
部会費	558,000
事業収入	90,000
交付金	180,000
協会補助金	100,000
繰越金	395,811
合計	1,323,811

支出の部

費目	予算
事務用品費	30,000
振込手数料	20,000
会議費	120,000
通信費	170,000
交際費	288,000
人件費	50,000
会報等印刷費	200,000
研究会等費	190,000
調査・編集費	100,000
選挙管理費	150,000
雑費	5,811
繰越金	0
合計	1,323,811

文責:岸田和明幹事(駿河台大学)

2000年度第1回図書館学教育部会研究集会概要

テーマ「図書館学教育におけるファカルティディベロップメント(1):インターネット環境を用いた情報サービスの指導」

日時 2000(平成12)年5月13日(土)10:30~16:00

会場 東横学園女子短期大学 211教室

日程

10:00- 受付開始

10:30-10:45 開会挨拶、会場・機器操作説明

10:45-11:15 報告(1)「図書館情報学教育における情報検索演習の位置づけ」

14:00-14:45 報告(2)「レファレンス・検索ツールとしてのインターネット資源の現況」

14:45-15:30 報告(3)「ネットワーク情報資源を活用した演習課題の作成」

15:30-16:00 質疑応答・意見交換、総括、閉会挨拶

図書館学教育部会の今年度第1回研究集会は、5月13日東横学園短期大学を会場に行われた。(参加者36名) 今回のテーマは、情報サービスの教育に焦点を当てた

「図書館学教育におけるファカルティディベロップメント(1): インターネット環境を用いた情報サービスの指導」である。

今日、ファカルティディベロップメントは大学教員にとって重要な関心事となっている。情報化、高齢化、国際化など図書館をとりまく環境が変化している中、21世紀の図書館を支えていく司書・司書教諭等の育成にかかわる図書館学教育もしかるべき変容を遂げていく必要がある。

レファレンスサービスや情報検索サービスにおいて、インターネット環境は不可欠のものになりつつある。そのような状況で教育内容はどうか、指導方法をどうすればよいかについて、講義と実際に情報機器を用い、デモンストレーションを交えた報告がなされた。

当日は、高山部会長の開会挨拶の後、図書館情報大学緑川信之氏による「図書館情報学教育における情報検索演習の位置づけ」、駿河台大学岸田和明氏による「レファレンス・検索ツールとしてのインターネット情報資源の現況」、そして図書館情報大学大庭一郎氏から「ネットワーク情報資源を活用した演習課題の作成」の3つの報告が行われた。それぞれに工夫を凝らした報告であり、実務的なウェブリストが紹介され、さらに参加者1人1台のパソコンを用意した優れた環境もあり、有意義な研究集会となった。

教育部会では今年度末に第2回の研究集会を企画している。

文責:逸村裕幹事(愛知淑徳大学)

(同文を図書館雑誌6月号に掲載)

報告(1) 図書館情報学教育における情報検索演習の位置づけ

緑川信之(図書館情報大学)

図書館情報学教育において情報検索演習がどのように位置づけられているのかを検討した。まず、司書講習の新しい省令科目における「情報サービス概説」「レファレンスサービス演習」「情報検索演習」の関係が、司書講習用の教科書でどのように反映されているかを確認した。「情報サービス概説」と「レファレンスサービス演習」の教科書では、一般的に、a. 情報検索は図書館における情報サービスのひとつ、つまり、情報検索サービスである、b. レファレンスサービス演習は印刷媒体を、情報検索サービスは電子媒体を扱う、c. レファレンスプロセスと情報検索プロセスは、共通する部分はあるにしても、異なる要素も多く、分けて説明した方がよい、という捉え方がなされていることがわかる。一方、

「情報検索演習」の教科書では、上記のbとcに関しては、「情報サービス概説」や「レファレンスサービス演習」の教科書と基本的に同じ捉え方をしているといえる。しかし、aについては微妙である。「情報検索演習」の教科書では、情報源の説明よりも検索機能の説明などに重点が置かれている。つまり、情報検索を「図書館の情報サービスのひとつ」としてのみ捉えているのではないと考えられる。次に、図書館情報学の専門課程における「情報検索演習」の位置づけの例として、図書館情報大学の場合を検討した。図書館情報大学では、少なくとも現在の科目の構成上から見ると、「情報検索論演習」は「情報サービス」や「レファレンスサービス」の系列ではなく、情報組織化の系列に入っている。一方、「レファレンスサービス演習」(図書館情報大学では「情報サービス論I 演習」)は、情報社会論の系列に入る。したがって、「情報検索論演習」が電子媒体を、「情報サービス論I 演習」が印刷媒体を扱うという分け方にはなっていない。

報告(2) レファレンス・検索ツールとしてのインターネット資源の現況

岸田和明(駿河台大学)

インターネットの急速な発展は、図書館におけるレファレンス・検索サービスの技術・方法を大きく変えつつある。すなわち、(1)紙媒体の参考図書、オンライン検索、CD-ROM検索でしか入手できなかった情報へのインターネット経由でのアクセス、(2)フォーマルな情報流通経路に乗らないような情報へのインターネット経由でのアクセス、が一部可能になったわけである。このうち、(1)については、検索機能が限定されている紙媒体の参考図書における情報をコンピュータで検索できるようになったこと、有料で提供されていた情報が無料で利用可能になったことに大きな利点がある。本報告では、上記の(1)に焦点を当て、いくつかの有用なインターネット資源を紹介した。具体的には、それらを大きく、(a) 図書館関連の有用なポータル・サーチエンジン、(b) 文献情報の探索ツール、(c) 事実情報の探索ツールに分けた上で、主要なウェブサイトを列挙するとともに、いくつかの有用なものに関しては、実際にコンピュータ教室の端末からアクセスして、その具体的な使用例を説明した。

報告(3)ネットワーク情報資源を活用した演習課題の作成

大庭 一郎(図書館情報大学)

筆者は、図書館情報大学において情報サービス関連科目として、次の2科目を担当している。「情報サービス論Ⅰ演習」(2年・後期、90分×2コマ×15回)は、司書講習の省令科目の「レファレンスサービス演習」に対応しており、「情報検索演習」(現職図書館職員対象の司書講習、4日間)は、省令科目の「情報検索演習」に対応する。「情報サービス論Ⅰ演習」では、様々な形態のレファレンス・ツール(冊子体、オンラインデータベース、CD-ROM、インターネット上の情報)を全て扱い、それらの情報源を駆使した演習を展開している。一方、「情報検索演習」では、情報検索の基本原則について講義し、CD-ROMとネットワーク情報資源を活用した演習を行なっている。ただし、「情報検索演習」の場合も、冊子体のレファレンス・ツールとの違い・使い分けを理解できるように、教材を組み立てている。現代の図書館では、伝統的な図書館資料の印刷媒体(図書・雑誌)の他に、オンラインデータベースやCD-ROMが利用されるようになり、1990年代には、インターネット上で提供される情報(ネットワーク情報資源)も視野に入れた図書館サービスを展開することが求められるようになった。このような状況を受けて、現代の図書館員は、個々の情報源の特性を十分理解し、多様な情報源を駆使した情報サービスを提供することが重要になってきている。その際、様々な情報源のどれを活用すればよいか、個々の情報要求に応じて適切に判断し、効率的かつ経済的な情報探索をすることが重要である。情報サービス関連科目では、多様な情報源を駆使できるような学生を養成することが求められている。

ネットワーク情報資源を活用した演習課題作成の探索テーマとして、(1)和書の書誌情報、(2)和書の市販図書情報、(3)日本の大学図書館の所蔵情報(図書・雑誌)、(4)日本の大学・短大・高専等の研究者情報、(5)世界各国の基礎データ(国土、人口、天候、資源、等)、(6)洋書の書誌情報、の6つを取り上げた。そして、従来の方法とネットワーク情報資源の活用方法について、それぞれ詳しく解説した。

次に、演習課題の実例として、J-BISC(1992年1月-1996年12月)用に作成した問題(7題)を用いて、4種類のネットワーク情報資源を検索するとどのような違いが生じるのかについて解説した。4種類の情報源とは、(1)国立国会図書館

のWeb-OPAC、(2)図書館流通センター(TRC)の「新刊書籍検索」、(3)日本書籍出版協会のBooks、(4)国立情報学研究所のNACSIS Webcatである。そして、最後に、参考文献(19点)の紹介を行なった。

研究集会アンケートより

アンケートでは多くの参加者の方から好意的なご感想をお寄せいただきました。例えば、

- ・ パソコンを利用しての研究集会だったので具体的でわかりやすかった。
- ・ インターネット上の有用な情報資源を知ることができてよかった。
- ・ 文献紹介が役立った。

などがその代表的なものです。今回の研究集会では、例年とスタイルをやや変えて、コンピュータ教室を使うことにより、各参加者が実際のインターネットにアクセスできるようにした点が特に好評だったようです。

一方、以下の2点について、ご批判をいただきました。

- ・ 昼休みが長すぎるなど、時間的なスケジュールに問題がある。
- ・ 会報等で案内された内容と実際の内容が異なっていて残念だった。

これらに関しては、今後の反省材料とさせていただきます。ありがとうございました。また、

- ・ 今回のインターネット情報資源リストの更新・追加のためのチャンネルがあると良い。
 - ・ 演習問題を持ち寄るような場があっても良い。
 - ・ 資料組織演習におけるインターネット活用も取り上げて欲しい。
 - ・ 図書館情報学に関連したもの以外の事例も欲しかった。
- というご要望・ご提案もいただきました。今後の幹事会での検討の参考にさせていただきます。ご教唆どうもありがとうございました。

その他、紙面の都合上ご紹介できませんが、いろいろなお感想・ご意見、または、ご自身の状況やご経験などをお寄せいただきました。この場を借りて、御礼申し上げます。

*なお、9月中旬に情報科学技術協会(INFOSTA)が開催する「情報検索演習セミナー」において、今回の研究集会と類似した内容が取り扱われる予定です。ご関心のある方は、

INFOSTAの機関誌「情報の科学と技術」7月号をご覧ください（直接お願いいたします）。
い(この件についての問い合わせ・申込は INFOSTA 事務局

(文責:岸田和明幹事)

全国図書館大会第12分科会へのお誘い

平成12(2000)年度(第86回)全国図書館大会

平成12(2000)年10月25日(水)―27日(金) 沖縄県

大会テーマ:万国津梁の邦沖縄から21世紀へ飛翔―図書館の夢を翼にのせて―

第12分科会(図書館員養成)

テーマ:図書館学教育の外部評価―半世紀にわたる司書講習および司書課程教育を顧みて―

図書館における専門的職員としての「司書」の資格は図書館法の第5条に依拠する。図書館法制定50周年にあたり、21世紀を目前にした今年の図書館大会では、この「司書」資格付与に関わる図書館学教育問題を考えてみたい。言うまでもなく図書館の発展には多くの要素が関連するが、中でもその専門的職員の持つ影響力は大きい。有能な「司書」の養成のためには、有能な教師と学生が集い、行きとどいた環境と体制のもとで教育が展開されなければならない。

このような視点で、50年の歴史を刻んできた、我が国の図書館学教育を振り返り、点検・評価して、これからの発展の参考としたい。
(部会長 高山正也(慶應義塾大学))

日 時 2000(平成12)年10月26日(木) 9:30～16:00(受付は9:00から)

会 場 共済会館 八汐荘(公立学校共済組合、沖縄県教職員共済会 那覇宿泊所)

プログラム

基調講演: 司書講習および司書課程教育の50年をふりかえって(仮題)

細野公男氏 (慶應義塾大学)(三田図書館情報学会 会長)

特別報告: 日本の図書館学教育の現状―『日本の図書館学教育』2000年度版を編集して

朝比奈大作氏(横浜市立大学)

発 表: 司書講習、司書課程等の受講生による評価―こんなことを学びたかった!これを学べてよかった!
などなど

大分県立図書館、豊見城村立中央図書館等の現場の司書の方々数名

部会員のみなさま!お誘い合わせの上、ご参加ください。

..... 会員異動について

会員異動については、協会会員係を経由して入退会処理をするため、掲載までにタイムラグを生じる場合があります。また、会員消息について何かお気づきの点がありましたら、ご面倒ですが担当幹事・野末まで、ご一報いただければ幸いです。

野末 俊比古(のずえ としひこ)

〒150-8366 渋谷区渋谷4-4-25

青山学院大学 文学部 教育学科

Tel. 03-3409-8111(ext.12096)

E-mail: tnozue@cl.aoyama.ac.jp